

平成 28 年度 国立大雪青少年交流の家教育事業

文部科学省委託事業「青少年教育施設を活用した国際交流事業」

「ユース オブ ワールド 2016」事業報告書

1 事業実施の背景

本事業は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が文部科学省より委託を受け、平成 26 年度から実施している事業である。これは、中央教育審議会の答申内容である「異なる文化や価値観による考え方を受け入れる能力や態度を育成する必要」「子どもたちに国際的な視野を持たせる様々な交流機会の提供」、さらに「グローバル人材育成のための青少年交流等の機会充実」「海外の青少年招聘事業の実施、日本の青少年との交流」を踏まえたものであり、独立行政法人国立青少年教育振興機構所轄の施設において、他にも様々な国際交流事業が行われている。当施設のプログラム設定にあたっては、日本一広大な大雪山国立公園内にある施設の立地を生かし、古くから自然と共生することを大切に育んできたアイヌ文化に触れながら、日本の青年と東アジアからの留学生が様々な体験活動をとおして交流を深めることを目指した。

また、雄大な自然の恩恵を感じながら、人種や国境を越えて絆を深め、持続可能な共生社会の実現に貢献し得る心を育てるとともにグローバルな視点を備えた次世代リーダーの育成を図ることもねらいとしている。青少年の体験活動の教育的な意義や効果は明らかであることから、本事業により、参加者の国際的視野の拡大、外向き志向の高まりが期待される。

2 事業趣旨

日本と海外の青少年との体験活動・交流プログラムを提供することで、海外の青少年の日本に対する理解促進を図るとともに、東アジアを中心とした海外の青少年との国際交流体験を通じて、日本の青少年の国際的視野を醸成し、東アジアの中核を担う次世代リーダーを養成する。

3 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大雪青少年交流の家

4 事業概要

- ・ 期 日 平成 28 年 8 月 11 日（木）～13 日（土）2 泊 3 日 交流会Ⅰ
平成 28 年 9 月 17 日（土）～19 日（月）2 泊 3 日 交流会Ⅱ
平成 28 年 10 月 23 日（日）成果報告のまとめ
- ・ 会 場 国立大雪青少年交流の家及びその周辺
- ・ 対 象 日本人高校生・大学生・勤労青年 10 人（実行委員会）
日本人高校生・大学生 10 名
東アジア出身の留学生 10 名（中華人民共和国、大韓民国、モンゴル国）
- ・ 講師・指導 北海道教育大学旭川校 教授 和田 恵 治 氏
千葉大学 教授 小 川 秀 樹 氏
アイヌ文化振興・研究推進機構アドバイザー 小 川 基 氏
十勝岳山麓ジオパーク推進協議会 職 員
一般社団法人美瑛町観光協会 職 員
美瑛町農業協同組合 職 員
一般財団法人丘のまちびえい活性化協会 職 員
ファームズ千代田 職 員

- ・企画委員 北海道教育大学旭川校教授 笠井 稔雄 氏
林野庁上川中部森林管理署長 飯塚 淳 氏
美瑛町長 浜田 哲 氏
北海道高等学校長協会道北支部長 田中 光彦 氏
公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 事務局次長 阿部 範幸 氏
美瑛町農業協同組合管理課長 神子素 賢一 氏
十勝岳山麓ジオパーク推進協議会事務局長 山下 浩史 氏
美瑛町観光協会職員 潘 幸遠 氏
- ・協力 ファームズ千代田 一般財団法人丘のまちびえい活性化協会
旭川地方気象台（十勝岳火山砂防情報センター） 千葉大学
（株）雪印パーラー
- ・後援 北海道教育委員会 北海道小学校長会
北海道中学校長会 北海道高等学校長協会道北支部
上川管内教育委員会連合会 美瑛町・美瑛町教育委員会

5 目的の達成指標（アウトプット）

- （1）参加者の満足度
- （2）文部科学省アンケート調査（記述を含む）
- （3）国際理解度アンケート調査
- （4）事後の追跡調査

6 広報

道内の各大学・短大の学生課、国際交流課宛に参加者募集のチラシを配布した。また、過去2年間の本事業への参加学生が在籍した大学には、担当職員が出向き先方の担当職員に参加者募集の協力を賜った。また、駐札幌大韓民国総領事館と在札幌モンゴル国名誉領事館を訪問し、領事や事務局職員にも参加者募集の協力を依頼した。

7 参加者人員・学年

参加者 34 名（定員比 120%）

内訳：日本人高校生 4 名、大学生 4 名、勤労青年 2 名 計 10 名（実行委員会）
日本人高校生 6 名、大学生 6 名 計 12 名（一般参加者）
中国人留学生 10 名、韓国人留学生 2 名 計 12 名（留学生）

8 事業日程・内容

（1）日程

【ファーストステージ】

	08:30	12:30	13:00	14:00	15:30	17:00	18:30	20:30	22:00	
8/11 (木) 11 AUG	バス移動 Bus 札幌→旭川→美瑛 Sapporo → Asahikawa → Biei	受付・オリ Registration Orientation	オープニング Opening Ceremony	レクチャー 「地球的観点から考 える自然との共生」 Lecture	レクチャー 「北海道の自 然と文化」 Lecture	夕食 Dinner	コミュニケーションゲーム Communication Games グループワーク・ディスカッション Group Work・Discussion	入浴・休憩 Bath time	就寝 Bed time	
	バス移動 Bus 大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center									
8/12 (金) 12 AUG	朝のつどい 朝食 Morning Meeting, Breakfast	バス移動 Bus	フィールドワークⅠ Field WorkⅠ 美瑛町観光協会訪問 美瑛町サイクリング	昼食(弁当) Lunch	フィールドワークⅡ Field WorkⅡ しろがねダム(水力発電所)・バイオマス エネルギー活用施設訪問	バス移動 Bus	夕食 Dinner	プレゼンテーション・多文化交流 Presentation, Cultural Exchange Time	入浴・休憩 Bath time	就寝 Bed time
	交流の家 Taisetsu Center	バス移動 Bus	美瑛町 Biei	バス移動 Bus	美瑛町 Biei	バス移動 Bus	大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center			
8/13 (土) 13 AUG	朝のつどい 朝食 Morning Meeting, Breakfast	アクションプロジェクトに向けた グループワーク・ディスカッション Group Work Discussion	昼食 Lunch	クロージング Closing	バス移動 Bus 美瑛→旭川→札幌 Biei → Asahikawa → Sapporo					
	大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center				バス移動 Bus					

【セカンドステージ】

		08:30	12:30	16:00	17:00	18:30	20:30	22:00
9/17 (土) 17 SEP		バス移動 Bus 札幌→旭川→美瑛 Sapporo → Asahikawa → Biei	フィールドワークⅢ Field WorkⅢ ジオサイトツアー(防災コース) 不動の滝・青い池等	夕食 Dinner	グループワーク ・ディスカッション Group Work Discussion	入浴・休憩 Bath time	就寝 Bed time	
		バス Bus		美瑛町 Biei		大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center		
07:15	08:30	09:30	12:00	13:00	16:30	20:30	22:00	
9/18 (日) 18 SEP	朝のつどい 朝食 Morning Meeting, Breakfast	バス移動 Bus	収穫体験(天然水・野菜) Harvest	昼食(弁当) Lunch	アクションプロジェクト Action Project	クッキング・フェアウェルパーティ・多文化交流 Cooking & Farewell Party, Cultural Exchange Time	入浴・休憩 Bath time	就寝 Bed time
		バス Bus	美瑛町 Biei Nature	バス Bus	美瑛町 Biei Nature	大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center		
07:15	09:00	10:30	12:00	13:00	14:00	18:00		
9/19 (月) 19 SEP	朝のつどい 朝食 Morning Meeting, Breakfast	ディスカッション プレゼンテーション Discussion Presentation	レクチャー「東アジア の友好の懸け橋として」 Lecture	昼食 Lunch	クロージング Closing	バス移動 Bus 美瑛→旭川→札幌 Biei → Asahikawa → Sapporo		
						大雪青少年交流の家 Taisetsu Youth Friendship Center		
						バス Bus		

(2) 概要・運営のポイント

実行委員が中心となって運営するプログラムを企画し、参加者が主体的に事業に参加できるようにした。また、交流会を「2ステージ制」とし、最初のステージ終了後に次のステージに向けた心構えをもつ時間を設けることで、参加者が自己の課題を追究し、主体的に関わろうとする意欲の向上を図った。

(3) 各プログラム内容

【ファーストステージ】

① 「レクチャーⅠ」(地球的観点から考える自然との共生)

北海道教育大学旭川校の和田教授より、地球の気候変動や火山活動の仕組みについてレクチャーを受け、人間の営みが自然条件により大きな影響を受けることや、そのことに向き合って生きていくことの大切さを学んだ。



② 「レクチャーⅡ」(北海道の自然と文化)

アイヌ文化振興・研究推進機構アドバイザーの小川氏から、アイヌ文化について講演をいただいた。自然界のあらゆるものが神であり、自然に対する敬意と畏怖の念をもって生活をしてきたアイヌの人々の考えから、改めて自然との共生について学ぶ機会となった。後半はアイヌ民族の伝統楽器「ムックリ」の制作体験を行い、製作後は自作のムックリの演奏を試み、講師の助言からもアイヌの考え方に寄り添うことができた。



③ 「コミュニケーションゲーム」

実行委員が進行役となり、グループでの「他者紹介」や「ドッジビー大会」を行って、参加者同士の親交を深め、和やかな雰囲気での活動を行った。



④ 「プレゼンテーションⅠ」

実行委員から留学生へ、北海道の身近な文化をスライドで紹介した後は、浴衣の着付けや「盆踊り」の実演など、活動を交え異文化に触れる機会を提供した。



⑤ 「フィールドワークⅠ（景観の視察）」

美しい丘陵の景観を、自転車を使って視察した。
火山活動によって造成された起伏のある丘が、農業と観光の両面で人々に恵みをもたらしていることを実感した。



⑥ 「フィールドワークⅡ（自然エネルギーの活用）」

木材チップを使ったバイオマスエネルギー活用施設の視察から、廃棄資源の有効活用についてレクチャーを受け、環境の配慮について学ぶ機会となった。



⑥ 「多文化交流」

各留学生から、自国の文化について紹介を受けた。
プレゼンテーションの言語は英語か日本語と指定していたが、ほとんどの留学生が積極的に日本語を用いたことで、学習意欲の高さが日本人の参加者には大きな刺激となった。内容については、日本と母国の慣習の差異などを語る留学生もいて、参加者にとっては興味深い発表が多かった。



⑦ 「ディスカッション」

期間中の学びや考えたことをもとに、「協働アクション」の立案を行った。最初に、実行委員からコンセプトの「自然との共生」から具体的な事例として「日本の環境問題」を内容に提示を行った。その後「フィールドワーク等で感じた事や考えたことをシェア」し「他地域、母国との相違」について意見を述べ合い「東アジア全体の共通課題と、それに向けた協働アクションプラン」を自分たちの身近にできる視点から考えるという流れでグループディスカッションを行った。
グループ発表では、美しい自然や景観を守るためにゴミのポイ捨てやマナーの問題を取り上げた発表が多かった。それぞれの問題の背景を考えて提案された「アクションプラン」の各案をもとに、次のステージで環境保護のために「植樹」に取り組むことを決定し、さらに、次節までに参加者それぞれが改めてプランを練り、持ち寄ることにしてこのステージを終了した。



【セカンドステージ】

① 「フィールドワークⅢ（防災への意識）」

セカンドステージでは、十勝岳山麓ジオパーク推進協議会の職員先導による、十勝岳「望岳台」周辺を散策した。堆積した地層から噴火の歴史について視察した後、火山活動における温泉の恩恵や、活動によって隆起した地形についての説明を受けた。下山後、景観を活用した観光地となっている「不動の滝」「白髭の滝」を訪れた参加者は、災害時の農業用水として活用可能なことを知った。また、噴火による災害対策施設である避難所や避難シェルターを視察し、災害への備えを学んだ。



② 体験活動（収穫体験）

ファースト・セカンドステージをとおして、丘陵を活用した畑作について視察した。また、畑作農家では実際に畑で収穫体験を行い、農業主から良質の作物を育てるための苦労や安全な食品提供への意識など、レクチャーをとおして改めて普段の「食」について考える機会となった。



③ アクションプロジェクト（今の自分たちにできること）

アクションプロジェクト①では、「環境保護」のための活動として「植樹」を実施した。ファーストステージの活動から、自然環境を守るために、森林の伐採が問題の一つであることに着目し、まずは自分たちの手で「植樹」を体験することから気持ちを高めたいという意見で決定した。

苗はひとり1本ずつ、大雪青少年交流の家の敷地に思いをこめて植えられた。アクションプロジェクトを通じて異文化の諸問題に向き合い、グループで課題を設定し、その解決に向けて自分たちにできることに取り組むことで、連帯意識の高まりが見られた。これを機に今後、参加者個々が様々な立場から国境を越えた問題に対しても前向きに、とらえる貴重な経験になったのではないかと考える。



④ フェアウェルパーティ（クッキングを兼ねて）

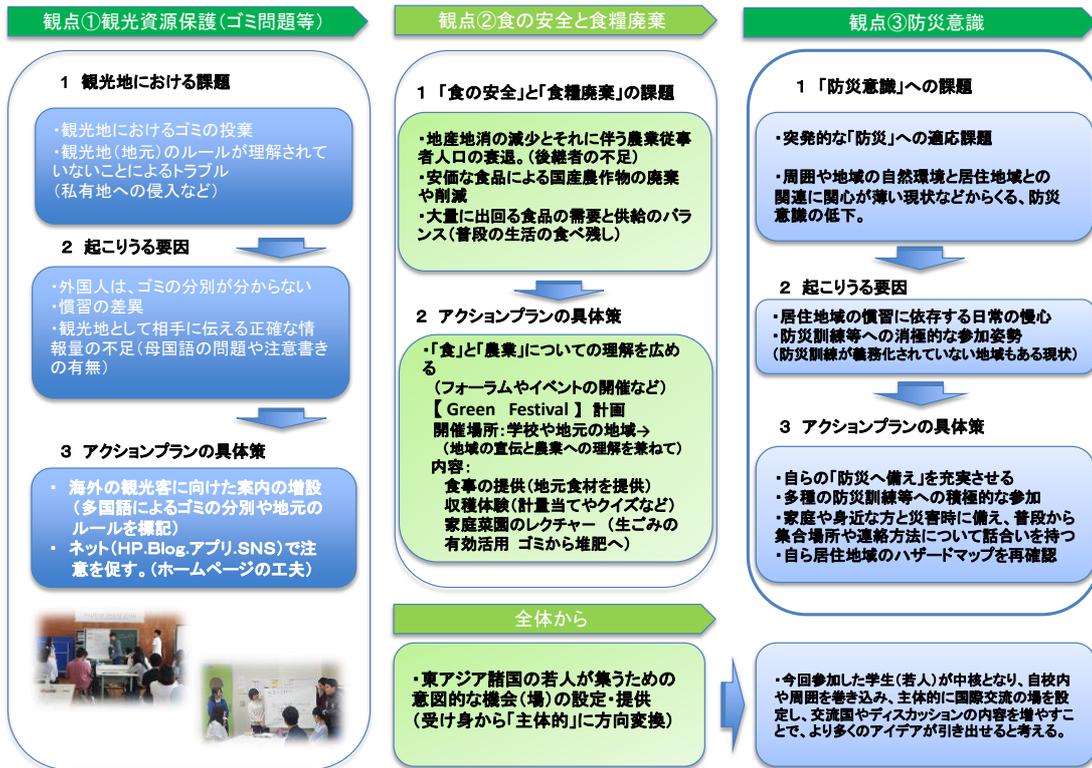
体験活動で収穫した地元の野菜を使い、東アジア諸国の家庭料理をレシピに、参加者全員が協力して調理に取り掛かった。はじめての異国料理に戸惑いながらも相談しながら完成を迎え、パーティでは、各グループが事前から考え準備をしていた国際色豊かなスタントが披露されるなど和やかな雰囲気が進められた。



【成果報告のまとめ】

2回の交流会をとおして、事業コンセプト「自然との共生」について理解を深めたことについて、「今の自分たちができること」をテーマに取組の成果をレポートに編集した。今後は、各々が自校や周囲の活動拠点でSNSなどを活用して発信していく予定である。





9 評価アンケートから

(1) 総合満足度

- ・実行委員： 満足 60% やや満足 40%
- ・日本人参加者： 満足 93% やや不満 7%
- ・外国人留学生： 満足 75% やや満足 25%

(2) 記述式アンケート(参加者の声)

【実行委員より】

- ・今後、日本で悩んでいる学生を応援する。また、海外に気軽に出てみることを勧める。日本の学生を支援したい
- ・様々な人との交流を体験することができ、今後のボランティアや仕事等で自国の方々以外の人々の意見等を取り入れ交流を益々深めていきたいと考えようになりました。
- ・今まで中国人や韓国人と交流することがあまりなかったが、今回交流することができ、以前よりは理解することができたので、他の人にも自分の経験を伝えていきたい。また、できたつながりも大切に何か機会があればまた関わりたい。

【日本人参加者より】

- ・留学に興味があるので、様々な人から聞いた海外の話は今後、準備する際に参考にしたい
- ・他国との違いを理解して、自分の中に「あたりまえ」と、「ちがい」を理解し受け入れるきっかけになりました。
- ・将来、仕事や普段の生活の中で環境についてよく考えていこうと思います。また、今回の交流で知ることができた中国・韓国の文化をさらに深く学びたいと思います。そして、国どうしの交流に少しでも携われたらいいと思いました。

9 事業の成果

(1) 事業背景の達成度

この事業の3か年計画では、初年度に「多国籍の青少年の体験活動をとおした友情のオアシス拡大」を皮切りに2年目には「異なる文化や習慣などの差異からの学びと国際理解の進化」を、そして最終となる今年度は、「グローバルな課題解決のための行動」をテーマに取り組んできた。

特に今年度は、「自分たちができること」「そのための行動」に重点を置き、各々がレクチャーや視察調査から得た情報を基に課題を設定し、その解決に向けての協働の時間を多く取り入れたことで、参加者全体に主体性を持たせることができた。

(2) 参加者の実際

実行委員については、大学生全員が留学（短期・長期）経験者であり、事業以前から高い外向き志向の傾向が見られた。事後の日本人学生のアンケートからは、「日本人の外向き志向」の向上について、大多数の参加者から外向き志向に繋がる記述が読み取れる。

このことから日本人参加者にとって、外国、特に東アジア諸国への興味・関心を強く引き出し、友好関係を築ききっかけとして効果的であった。

留学生のアンケートからは、「日本に対する理解増進を図る」の目的に対して、日本における「自然との共生」についての考え方に興味を示し、各々が日本の文化や慣習に理解を示す記述が多く読み取れる。また、自己完結型ではなく、自らの学びを積極的に母国に発信するなどの記述が多く見られた。さらに、今回の事業（国際交流事業）を母国において組織運営に携わり、東アジア諸国の相互理解を深めていきたいとする意欲的な学生の意見も聞かれた。

10 事業の課題

(1) 事業の趣旨・プログラムの展開

今回の事業から、グローバル人材の要素である「異文化理解」の向上を図るため、日本の青少年と外国人留学生の両者に対して異文化の紹介プログラムを実施した。事後のアンケート結果では、参加者全体の「異文化理解」の要素が大きく向上している。また、「日本人としてのアイデンティティ」も向上した。これは、今回のプログラム構成で、参加者全体でのディスカッションにおいて、体験活動やフィールドワークで得た情報を基に意見交流を行ったことで、自国の文化を再認識する機会が提供できたものと推察する。

一方で、日本人参加者にとっては、異文化に直接触れる体験の機会が少なく、留学生から提供される「映像や資料による母国の史跡や料理等の紹介」・「母国語講座」、または「フェアウェルパーティ」での身近な生活文化紹介等、受動的な要素が強かった。今後に向けては、日本人参加者の主体性・積極性を高め、交流国をより理解するための直接的な体験プログラムの構築が必要となる。

(2) 広報等（参加者募集）

東アジアの多様な国からの参加について、北海道内の大学に在籍する留学生の割合は、中国が半数以上に達する現状から、この2年間で参加した中国人留学生が7割を占め、韓国人が2割、モンゴル人が1割と、異国の文化や習慣を学ぶ機会としては偏りが見られた。交流の対象を留学生とした場合、出身国をバランスよく調整するためには大学等の関係団体とのより密接な協力体制が求められる。